小式部内侍が大江山の歌の事

和泉式部が、〔藤原〕保昌の妻として丹後の国に下ったときに、京で歌合があったが、(その娘)小式部内侍が、歌合のよみ手として選ばれてよむことになったが、〔藤原〕定頼の中納言が、からかって小式部内侍に、「丹後へおやりになったという使いは戻って参ったか(母上の和泉式部の助けがなくてお困りでしょう)。」と(小式部内侍の私室に)声をかけて、部屋の前を通り過ぎなさったところ、小式部内侍は、御簾から半分ほど出て、(定頼の着ている)直衣の袖を引き止めて、

大江山……大江山、生野という所を通って行く、丹後への道が遠いので、まだ天橋立を訪れたことはございません。そのように、母のいる丹後は遠いので、まだ便りもございません。

と(定頼に歌を)よみかけた。(定頼は)思いがけないことであきれて、「これはどういうこと。」とだけ言って、(当然の作法である)返歌することもできず、(引き止められた)袖を振りきってお逃げになってしまった。小式部は、このことにより歌人としての世の評判が出て来たそうだ。